

アジア舞台芸術祭
参加者インタビュー#08

西菜花さん（アートキャンプ受講生、20代）

現在、会社員として働いている西さんは大学時代、デザインを学んでいました。アートに関わる仕事がしたいと思っていましたが、一度は諦め一般企業へ就職。しかし再びアート業界への転職を志し、一年程前に東京へ引っ越してきました。仕事の傍らアートイベントにスタッフとして参加する等、積極的に活動しています。演劇の経験はなく地元の劇場がどこにあるかも知りませんでした。東京へ来てから関心を持つようになり、アジア舞台芸術祭にアートキャンプ受講生として参加しました。

「国際共同制作ワークショップでは、稽古と本番の両方を観られたのがよかったです。たとえば『アマルガム手帖』冒頭の15分もの長台詞は、役者さんが稽古ではすごく苦勞されていたのに、本番では全部覚えていて。完成された舞台というのは努力の結晶なんだ、人が苦勞して作ったものって美しいな、と改めて思いました。アートでも、作品の出来ていく過程が実は面白い。（本番だけを観るより）一步踏み込んだ面白さがありました」

また海外旅行が好きで、これまでアジア各国をはじめアメリカ、ヨーロッパへも一人旅をしたという西さん。異文化への関心も、アジア舞台芸術祭に参加した理由のひとつでした。

たとえば『ハノイの幽霊』（日本の演出家・森新太郎氏と日本・ベトナムの俳優チーム）。に登場した「チャー」。日本人にはあまり馴染みがありませんが、ベトナム人にとっては国民的な食べ物です。

「私は東南アジアを旅した経験があったのでたまたま知っていましたが、日本のお客さんは普通チャーという食べ物がどんな食べ物かイメージできないと思います。逆に、日本人にとってはとても身近なおにぎりも海外の方にはあまりイメージできない食べ物でしょう。そういった食文化によって浮かび上がるギャップ、日本とベトナムそれぞれの“故郷の味”によって浮かび上がる文化のギャップ（差異）が印象的でした」

また同じくアートキャンプに参加していた台湾人の女性とは、こんなやり取りがあったと言います。

「『案山子』（ベトナムの演出家グエン・ホアン・トゥアン氏とベトナム・日本の俳優チーム）を観ているとき、隣に座っていた彼女から“あれは日本の伝統的な衣装ですか？”と聞かれたんです（※ベトナム伝統の笠以外はオリジナル衣裳）。“違います”と答えたのですが、私にはベトナム風の衣裳に見えていたものが、彼女には全く違う見え方をしていたんだな、と」

たとえば台湾、中国、韓国、日本の人は見た目では区別がつかないほど似ているけれど、文化的には大きく違う部分もある。西さんが舞台上で表現される異文化同士の共通性／差異だけではなく、受け取る側＝観客も均一でないことを体感できたのは、アートキャンプならではの体験だったのかもしれない。

「自分が当たり前だと思っていることが、当たり前ではなくなる。自分が日本人であるということを、他者の視点から考えさせられる。異文化に触れることをきっかけに自分の視野が広がることが海外旅行の醍醐味だと思うのですが、アジア舞台芸術祭では客席にいながら、外国を旅したような感覚を味わえました」

またアジア各国の演劇人たちが『芸術性と大衆性』について議論したラウンドテーブルや、世界中で活躍する振付家、無垢舞蹈劇場（台北）のリン・リーチェン氏による特別レクチャーは、演劇の制作現場に携わっていない西さんにとっても「すごく面白かった」と言います。

「これまで演劇についてそこまで深く考える機会はありませんでしたが、新しいお客様の開拓はどの業界にも共通する課題だと思います。『芸術性と大衆性』についてのディスカッションは、演劇という分野について考える上で概念的な基礎になるようなお話が多くて、とても有意義でした。特別レクチャーは、普通に生きていたら知ることのないような空気が流れていて、衝撃的でした。五感で感じる初めての世界で、自分の視野が広がったと思います。（アジア舞台芸術祭は）演劇をやっていない人でも楽しめる場なんだということをもっと知ってほしいですね。演劇経験のない私でもこれだけ色々なことを感じたくらいなので、演劇をやっている人は絶対に参加した方がいいと思う。演劇に対する考え方が広がると思います」